

「伝統芸能の担い手」としての芸者イメージに関する一考察

東京芸者の語りより

中岡志保(広島大学大学院)

本報告は、発表者が芸者としてフィールドワークを行ったA花柳界における、近年の変化に注目する。A花柳界では10年ほど前まで、ほとんど仕事が無かった時代もあったというが、現在では舞台でのイベントを、忙しい日には2、3本抱え、総勢20人にも満たない小さな花柳界であるとはいえ、芸者が不足する日もあるほどに座敷数を増やしている。こうした変化の背景には、芸者自らによる、日本の伝統芸能を担う存在であるという語りがかかせない。そこでこのように芸者が語ることで、どのような意味を持つのかについてみていく。

A花柳界では、新たな顧客を獲得するために活動の場を広げている。例えば、芸者の芸能を披露する場としての、またお酌をする場としての出先を、座敷という閉ざされた私的な小空間から、ホテルの宴会場や時には野外舞台、さらに海外公演など、公的な広い舞台へと広げてきている。このように活動の場を広げることで、A花柳界の芸者は、より多くの収入を得る場と、これまで花柳界のご臈員さんではなかった客を、新たな顧客として花柳界に引き込む機会を得ることができるようになった。

このような活動やそれに関する情報を通して、花柳界に足を踏み入れた新規の顧客は、芸者に対して伝統芸能の担い手としてのイメージを持って入ってくるが、伝統芸能に精通しているというわけではなく、また、伝統芸能に強い関心があるというでもない。そのため、一回限りのお座敷体験ではなく、なじみの客になっていく客の関心は、あくまでも芸者としての女性個人にある。しかし同じような動機でも、クラブやスナックでは味わうことのできない妙味を知ることになる。

花柳界のなじみ客となった“ご臈員さん”は、大きく2つのパターンに分類できる。芸能のことは分からないが、酒席には特定の姐さんを指名する。または、芸者を呼ぶ。芸能に精通し、座敷で鳴り物(三味線)に合わせて小唄などの芸を披露する。またときには、芸者衆と芸能の同門弟子になる。このように2つに分類したものの、客側にしてみれば、いずれも好みの芸者がいるために、その芸者を呼んで遊んでいるに過ぎない。しかし、芸者からみれば、この客とには、大きな違いが存在する。芸者はこの客をたくさん持つことがいいと言われる。このような客が、芸者として一本立ちしたときに、支援者につながっていくとされているためである。そのためにも、自らの芸の腕を磨く必要がある。一方、芸の才能もしくはセンスに恵まれていない芸者や、芸に対して熱心に取り組む姿勢が感じられない芸者は、芸者のあいだで格下にみられる。

しかし、芸者は伝統芸能の腕だけ磨いていけばいいというものでもなく、客の好みに合わせてカラオケも一定レベルのものを歌えなければならないし、三味線で歌謡曲の伴奏をすることを求められることさえある。あくまでも芸者の仕事は、酒席で客の相手を器用にこなすことである。それにもかかわらず、伝統芸能に長けていることこそが、芸者にとって欠かせないこととして語られる。

こうした芸者の語りは、これまで東京の芸者が排除し続けてきたマスコミを、今では利用するかたちで、さまざまなメディア上で発信されてきている。それらの情報を得て新規の客がやってくる。その後も花柳界に足を運び続け、なじみの客になっていく客の心的要因には、特定の女性に対する性的な関心がつきまとっている。そのような関心を、うまくそらせる話芸を身につけてこそ本当の芸者なのだと、年配の芸者は新人芸者に助言するが、そうした性的な事柄に言及した語りは、マスコミに取り上げられることはまずない。マスコミは、伝統芸能の担い手として芸者を象徴的に扱う情報を流し続ける。しかし、その扱い方は、芸者側が欲しているものなのである。

伝統芸能の担い手としての側面を強調する語りには、自らの地位をあげようとする芸者のしたたかさをうかがい知ることができる。また客にしてみれば、今では情報誌やケーブルテレビなどで、地域の伝統、ひいては日本の伝統を守る存在として頻りに取り上げられるようになった芸者を呼んで遊ぶことは、クラブやスナックの女性とただ飲むのとは異なり、日本の伝統芸能の担い手としての芸者を呼んでいる自分に対し、外部から向けられるであろう“ステイタス”を付与された気分を味わえることにもつながるのである。

【ジェンダー、芸能】